

『『野球』を通してみた移民』から 『『移民』を通してみた野球』へ

石原豊一

はじめに

私は、これまで主に、越境するアスリート、専門的にはスポーツ労働移民 (Sport Labor Migration) というのですが、これについて研究してきました。その大枠というのは、以下の通りです。

グローバル化という現象がいつから始まったかという問いの答えについては、研究者の数だけ答えがあると思いますので、ここではちょっと置いておきます。ただ、その言葉が、一般に使われ、多くの人がそれを実感するようになったのは、おおむね1990年代と言っていいでしょう。私が研究対象とする野球についても同様であることは、この年代のちょうど真ん中にあたる1995年に、あの野茂英雄がメジャーリーグ (MLB) に渡り、一大ブームを巻き起こしたことに象徴されると思います。彼が日本の野球少年たちに多大な影響を与えたことは、この年代の終わりまでに、イチローに代表される日本のプロ野球 (NPB) のトップ選手だけでなく、日本ではドラフトの対象にもならなかった、アマチュアでもトップレベルと言えないような選手までもが、海を渡って「プロ」としてプレーするようになったことであらわれています。1990年代の終盤、それは、バブルがはじけ、日本が「失われた20年」に突入した頃だったのですが、日本でさしたる実績もない選手が、「メジャーリーグに挑戦」とばかりに、それこそ猫も杓子も海を渡り、それがメディアで「夢に挑戦する若者」の姿として美しく語られました。

実は私、1995年の7月11日、テキサス州アーリントンの球場で、野茂投手の雄姿を直接目に見ています。大学を卒業した後3年間務めた仕事を辞め、約1年、世界中をフラフラとしていたのですが、この日、日本人初のMLBオールスター戦の先発投手となった彼を観るため、テキサスに足を運んだのです。この夏、私は約2か月、北米のプロ野球を、上はメジャーから下はマイナーに至るまで、毎日のようにこの目で見ました。そしてこの時、アメリカには独立リーグというプロ野球があることも知りました。MLB傘下のマイナーリーグ球団は、MLB球団が雇った、将来的に見込みのある選手を預かってリーグ戦をこなすのですが、独立リーグはMLBに親球団を持たず、独自で選手を雇い、リーグ戦を行うのです。当然そのレベルは高くなく、とくに試合の終盤は、毎度のようにリリーフ投手が打たれ、もつれます。そういうリーグのロースター (選手名簿) には、時折日本人の名前も見受けられました。

帰国後、MLBブームが訪れ、先述のように「メジャーに挑戦する熱き若者」像をメディアが語るのを見て、私は違和感を感じていました。MLB傘下のマイナーリーグでさえ、下の方のクラスになると、そのレベルは、私から見れば「プロ以下」でしかなかったからです。これが私のスポーツ労働移民研究の原点です。

その後、私は何度も野球を訪ねて世界中に足を運びました。我々の住む日本では、米国と並んで世界最高レベルの野球が行われています。しかし、それ以外のところでは、たとえそれが現地のトップリーグであっても、日本ではアマチュアレベルにしか過ぎないことがほとんどで、さらに言えば、多くの国のリーグは、それぞれのもので完結しているというよりは、北米や日本など、他国のより上位のプロリーグへの「人材供給地」としての色彩の方が濃いのです。先に述べた、野球のグローバル化という現象は、MLBやNPBの人材獲得網が拡大したことによって、スポーツ労働移民の増加に拍車をかけました。この結果出現したのが、日本では「プロ以下」でしかない選手の国外での「プロ」としてのプレーという現象です。

そういう選手を抱えることによって、世界規模においては、「プロ野球選手」のプレーレベルの下限は確実に下がりました。報酬、プレーレベルとも低い、上位リーグへの選手育成を目的としたリーグが世界各地に起こり、それまで「スポーツセレブ」になるためのトップ選手の越境としてイメージされていたスポーツ労働移動像が揺らいだのです。正確にはこの種のエリートアスリートの移動は、エンゼルスの大谷翔平選手をみてもわかるように、今現在も存在し、スポーツ労働移動の主流をなしてはいるのですが、それに加えて、先進国における産業構造の変化とそれに伴う若者の就業状況の悪化による、若者が思い描くキャリアパスの従来モデルからの乖離の反映として、冷静に考えれば見込みのない「夢」への挑戦としてのアスリートの越境という現象があらわれたのではないかということ、私は博士論文にまとめ、リライトした上で公開しました（石原：2013）。ここで私が「自分探し型」として分類した野球選手の国際移動は、プロアスリートというより、一種の体験型ツーリズムの消費者と言えます。1995年7月11日のアーリントンボールパークで言えば、彼らは野茂投手よりは、一介のバックパッカーだった私に近い存在と言えるでしょう。これまで私は「スポーツ労働移民」という語を使ってきましたが、グローバル化の末端で起こっているアスリートの移動からは、「労働」の語を外さねばならない段階に来ているのです。この諸相をもう少しつぶさに見てみようとするノンフィクションとして書いたのが、『もうひとつのプロ野球』です（石原：2015）。

無論、このような新しいアスリートの国際移動が起こる一方、越境するアスリートの大多数は、競技能力を「飯の種」とする職業アスリートです。必ずしも経済的要因からだけプレーしたわけではないものの、プロ野球草創期、バットとボール、そしてグローブを携えて全米各地、そして時として国境を、そして太平洋を渡った野球選手は、まさに「野球労働者」でした（佐川：2015）。今回講演をされたステイブルズ氏の描いた銭村健一郎はまさにその一例であるのです。

この講演会に今回、呼んでいただいたのですが、奇しくも私の研究の射程も、「野球を通してみた移民」から「移民を通して見た野球」へ移っていたところでした。この冬、私は、中米のプロリーグ、いわゆるウィンターリーグに足を運んだのですが、そこで、ひとりの日系ブラジル人選手に出会いました。1995年、あてどもなく南米をさまよう中、通り過ぎたサンパウロのリベルダーヂ（日本人街）と野球が、メキシコで結びついたのです。以下では、明治以来太平洋を渡った「日本人」、「日系人」¹⁾にとって野球がいかなる意味をもったのか、その研究を私は今はじめようとしているのですが、そのさわり部分について述べていきたいと思います。

1. 「日系人」の発生と拡大

1-1. 私が肌で感じた「日系人」

日系人とは、ご存知のとおり日本から海外に渡った移民のことです。大多数の人が思い描くその言葉のイメージは、日本生まれの1世というより、はるか昔の先祖が外国に住みついて、今では「外国人」になってしまった人々という感じでしょうか。そういう人々がブラジルという地球の裏側にある国にいることを私が知ったのは、たしか小学5年生の時でした。私が通っていた、新興住宅街を抱える奈良の田舎の小学校に、「日系ブラジル人」の小学生の訪問団がやってきたのです。我々と同じ風貌をしながら日本語を解さない彼ら彼女らの姿を見て、その存在が何か遠いもののように感じたことをうっすら覚えています。当時の私にとっては、「日系人」とは遠い歴史的存在でした。彼らの先祖は遠い昔に遠くに行ってしまうと、だから、同じ時を共有しているはずの彼ら彼女らも何か遠い存在に感じてしまうのだと、私はその時思いました。

時が流れ、私は大学を卒業し、就職し、その職を3年で辞めました。私の学生時代はいわゆるバブルの時代で、職を辞めたときは、まさにそれが崩壊し、「失われた20年」に突入しようとしていました。ちなみにこのシンポジウムの主役であるステイブルズ氏と、コーディネーターの吉田先生が、私と同級生であることを今日知りました。それぞれの人生の中で野球に触れあってきた3人が今日、「太平洋を渡る橋」でつながったことに運命的なものを感じます。

ともかくも1995年、私は、世界中を放浪しました。3月半ばに日本を立ち、初めの半年は、南北アメリカを巡りました。ニューヨークから南米に入り、7月初めにメキシコに入って以降は、約2か月、北米大陸を、毎日野球を観ながら巡りました。その前に、ブラジルのサンパウロを訪問したのですが、そこで日本人町・リベルダーヂに宿をとりました。たまたま知り合ったブラジル美女にこのこついでいったところ、紹介されたのが、彼女の恋人である日系人でした。当時のバブルをひきずった、ちゃらちゃらしたニッポン男児とは全く違う、昭和の映画スターのような角刈りの彼でしたが、日本語は全く話すことはできませんでした。

ブラジルをあとにして訪ねたパラグアイ、そして数年置いて足を運んだドミニカ共和国（以下ドミニカ）でも日系人に会いました。そこで出会ったのは、ともに長野県出身の方で、流暢な日本語を話していました。その時初めて、私は「日系人」や「移民」が決して歴史的存在ではなく、現在進行形の現象であることを肌で感じたのです。

1-2. 日系人の歴史

前置きが長くなりましたが、ここで日系人の歴史についてざっと触れてみたいと思います。先述したように、日系人とは、日本から海外に渡った移民のことですが、おそらく多くの人が抱く「移民」のイメージは、ヨーロッパからアメリカに渡った人々の多くがそうであったように、移転先に永住するというものでしょう。私もそう思っていました。しかし、こと日本から世界各地に渡った人々のほとんどは、移転先で一旗揚げたて故郷に錦を飾るというつもりであったようです。

日系人の歴史は近代化とともに始まります。明治政府が推し進めた「富国強兵・殖産興業」政策は、農業中心から工業中心への産業構造の変化をもたらします。その中で行われた抜本的

な税制改革であった地租改正は、農村社会の崩壊をもたらしました。要するに農村部において「食えない」人々が大量に発生したのです。当時の明治政府には、彼らを養う余裕はありませんでした。そこで、彼らにとりあえず海外で出稼ぎをさせようという発想が生まれました。つまり、日本からの移民は、明治政府が余剰人口排出のために始めた政策だったのです。

とは言え、政府もはじめは労働力の海外への送出には慎重でした。記録に残る一番古いものは、1868年、つまり明治元年に、当時独立国だったハワイと、スペイン領だったグアムへ送られた「元年者」と呼ばれる集団移民です。彼らは移転先でサトウキビやパイナップル畑の単純労働に従事しました。しかしながら、彼らへの扱いの酷さを見かねて、明治政府は翌年には彼らを連れ戻します。以後、しばらくの間は政府も労働力の国外送出には消極的になります（高橋：1993, 9-10, 丸山：2010）。

しかし、政府が進める近代化策とそれに伴う農村における貧民の発生は、待ったなしの状況を作り上げ、地租改正完了後の1883年、政府は、オーストラリアへの採貝潜水夫37人の送り出しを許可します。そして翌年、ハワイと移民協定を結ぶと、政府が後ろ盾になった「官約移民」944人が送り出されました（丸山：2010）²⁾。

このハワイ移民がやがてカリフォルニアに渡り、日系アメリカ人となっていくのですが、なにしろ貧しい日本から一旗揚げにやってきましたから、とにかく安い賃金でもよく働きました。その結果、現地の人々が職を奪われるかたちになり、排日機運が高まってきます。ここでは詳しくは述べませんが、要するに、1890年代以降、日本人が米国へ労働移動することが非常に難しくなっていきます。1908年には日米間で紳士協定が結ばれ、新規のアメリカへの移民は事実上不可能になりました。最初のブラジル移民を乗せた「笠戸丸」という船がコーヒーの積出港として有名なサントス港に入港したのがこの年の6月であるのはある意味必然だったのです。

実際にはそれ以前、アメリカで排日運動が盛り上がる中、それに代わる移民の送出先として政府はブラジルに目をつけてはいましたが、現地の状況の悪さや、移民の働き先として目論んでいたコーヒー産業の価格暴落による縮小もあり、移民事業の計画は頓挫してしまいました。1908年のコーヒー産業を巡る状況も好転の兆しは見せていなかったのですが、それでも移民送出を決行したことは、この事業の本質が多分に「棄民政策」であったことを物語っています。当然のごとく、移民を待ち構えていたのは過酷な生活でした。先述したように、彼らのほとんどは、渡航当初、ブラジルに骨を埋めるつもりなどなく、ひと財産築けば、故郷に凱旋するつもりでした。しかし、コーヒー不況の真ただ中であって思ったように稼げず、結局、永住を余儀なくされていくのです。

ブラジルでも日系人たちは、差別にあいます。とくに、日本が軍国主義に突入していった1930年代、当時のヴァルガス政権は、ヨーロッパ系「ブラジル人」への同化策を推し進め、それに伴い、事実上の日本からの移民受け入れ停止に踏み切ります。この中、隣国のパラグアイへの移民事業が開始されました。現在、この国には、南部のアルゼンチン国境の町、エンカルナシオンやブラジルとの国境、シウダー・デル・エステ周辺などに約1万人の日系人がいます。私自身、これらの町や首都アスンシオンで日系人と出会いました。エンカルナシオンで商店を開いていた方は、昭和30年代に長野から移ってきた1世の方でした。この周辺でも、日系人によ

で野球は行われ、パラグアイの日系人からは、ヤクルト・スワローズのエースとなった岡林洋一というピッチャーも出ています。

ともかくも、日本は、太平洋戦争によって、米英だけでなく世界中の国を敵に回してしまいます。ブラジルだけでなく、世界各国で日系人弾圧がなされ、日系人たちは本国の政策によりますます苦難にさらされました。

第2次世界大戦が終わり、状況が落ち着くと、日本から中南米への移民送出が再開されました。明治時代同様、戦後の日本は全ての民を食わせることができなかつたのです。ブラジルへの移民事業は、サンフランシスコ講和後の1953年に再開されます（高橋：1993）。ちなみに、ブラジルは第2次大戦に際して、連合国側についています。

日本政府は、これと同時に、余剰人口排出先として、戦火を直接交えなかつたドミニカにも目をつけました。ここでは詳しく触れませんが、この「棄民政策」の酷さはのちに暴かれることとなります。私自身の体験を申しますと、私がこの国を初めて訪問した1997年、ハイチ国境のダハボンという町を訪ねたのですが、ここで地元民に連れられて、日系人のお宅にうかがいました。ここの住民も長野県出身の1世でした。ドミニカとハイチはエスパニョーラ島というカリブ海の島を2分していますが、歴史的に両国は仲が悪く、日本から移民を受け入れたドミニカ政府は、彼らを防波堤とすべく国境地帯の不毛の地に配置したのです。要するに屯田兵として日本人を利用したのです。彼らの生活もまた、困難を極め、のちその多くは帰国もしくは再移住しました。現在ではこの国には約800人が残るのみらしいです。私が出会ったのは、このうちのひとりだったということになります。

また、この国は野球が盛んなことで有名ですが、私が訪ねた、というよりハイチに向かうため経由しただけなのですが、その国境の町、ダハボンにも野球場があることを後日、野球雑誌で知りました。その野球場を造ったのは、本国に「棄てられた」日系人でした。

2. 日系人と野球

2-1. 近代スポーツの広がりのとらえ方

前章で中南米の日系移民と野球について、少々触れましたが、ここからは、世界、おもに南北アメリカ大陸に渡った日系人にとって野球とはどのような存在であったのかについて考えていきたいと思います。

スポーツというのは、多分に近代的な文化事象です。無論、近代以前にも生産活動以外の身体的活動を人間はしていましたが、それらは相撲のように神事の一部を構成していたり、近代以前のフットボールや拳闘のように確固としたルールがなく、しばしば死者が出るような危険性を孕んでいました。それらが、産業革命後、統一したルール、数値化などの「近代性」を備えた娯楽に変わっていきます（グットマン：1997）。学問の世界では、この「近代性」を備えているか否かによって、「伝統スポーツ」と「近代スポーツ」を区別します。一般に我々が「スポーツ」と呼ぶのは近代スポーツのことです。

この近代スポーツが、帝国主義の波に乗って世界中に広まっていったことは、サッカーに典型的に表れています。本稿で主な舞台になっているブラジルには、イギリス人が持ち込んだと

言われています。ともかくも、サッカーから見て取れるように、近代以降、スポーツは、いち早く産業化を果たした列強諸国から、従属的地位に甘んじることになる植民地、半植民地に伝わることになります。その過程で、スポーツを受容する側では、現地の伝統スポーツが衰退、消滅していくことになります。つまり、スポーツの伝播、拡大は、多分に「文化帝国主義」（トムリンソン：1997）的な側面をもっているのです。アフリカなどでは、スポーツが宗主国による現地人教化のツールに用いられています。

米国生まれの野球においても、それは同じことで、ベリーによって近代への扉を開かれた日本が、明治期に野球を受容しましたし、また、その日本がやがて帝国主義列強の仲間入りをすると、その植民地となった台湾の住民、日本人は彼らを「蕃人」と呼んだのですが、その彼らを「日本人化」するツールとして野球は利用されます（林：2011）。

しかし、一方で、強国の文化事象であるスポーツを受け入れた弱国の人々は、そのスポーツを再解釈することにより、自らのアイデンティティを強化することもあります。

一例を挙げますと、前章で登場したカリブ海のドミニカは、幾多のメジャーリーガーを輩出することで名の知られた国です。事実上の米国の支配を何度も受けてきたこの国には、当然のごとく野球が伝わり、その後、プロ野球産業における「安価な労働力」の「製造工場」となっていくのですが、ドミニカの人々にとっては、野球はなんと言っても貧困から脱出するツールであり、さらには、自分たちを抑圧する「グリーンゴ（白人の意）」の国、米国に対抗する「抗争の場」（Klein:1991）でもあるのです。つまり、強国もしくはマジョリティの文化事象の受容は、弱国、あるいはマイノリティの人々のエスニック、ナショナルなアイデンティティ再確認のツールとなりうるのです。

日本で言えば、「スモールベースボールで世界の頂点を目指す侍ジャパン」を思い浮かべるとわかりやすいと思います。また、その日本を頂点とするアジアにおけるヒエラルキー構造においても、旧植民地であった韓国の人々が、サッカーや野球を「克日」の手段としたり（大島：2006, 2008）、同じく旧植民地で、現在は国際的地位も不安定な台湾での野球ワールドカップ開催により「台湾人」アイデンティティを活性化させたり（童：2012）という現象が見られます。

2-2. 野球のはじまりと広がり

野球、つまりベースボールの起源は、ヨーロッパで行われていた打球技に求めることができます。北米にヨーロッパからの移民が押し寄せる中、19世紀中葉に原初的なベースボールが発生したようです。米国の「伝説」では、1839年、ニューヨーク州のクーパーズタウンという片田舎でダブルディという人によって定められたルールに則った最初の試合が行われたのが「野球事始」とされています。現在この町には、野球殿堂があります。

しかし実際には、この時期には、様々なルールの「ベースボール」が入植の進んだ北東部各地で行われていたようで、現在の野球に直接連なる「ニューヨーク・ゲーム」は、1846年、ハドソン川対岸にあるニューヨークの隣町、ホーボーケンで最初に行われたとされています。これが、周辺の様々なベースボールを吸収していき、南北戦争（1861～1865）によって、南部にも広がっていったようです。その過程で、ヨーロッパのゲームではない米国独自のこのスポーツに「アメリカの象徴」を見た人々は、やがてこれを「ナショナル・パスタタイム（国民的娯楽）」

とみなすようになります。その中で、エスニシティ別のチーム、リーグも発生し、マイノリティの人々は、野球受容によって米国社会の一員となる一方、先述した「抗争の場」を得ることによってエスニックなアイデンティティを再確認するようになります。

19世紀の終わりに日本から米国に移民が渡ってきたことについては、前章で触れましたが、「黄禍論」に代表される白人コミュニティとの軋轢が生まれる中、日系人たちは、野球をプレーすることによって、「日本人」たるアイデンティティを再確認する一方、白人との軋轢を緩和するツールとして野球を利用します（矢ヶ崎：1996、佐山：2015）。米国の北にあるカナダでもこれは同様で、数年前に映画にもなったバンクーバー朝日という日系人チームは、カナダにおける黄色人種排斥の中、「ニッポン」を表現する場として機能しています（フルモト：2014）。このチームはカナダの野球殿堂入りしています。

ステイブルズ氏が描いた銭村健一郎もそういう中でプレーした選手のひとりでしょう。実は私、5年前に銭村が住んでいたカリフォルニア州フレズノを訪ねました。先ほど見せていただいた写真の球場はもうなく、ダウンタウンに新球場が建てられていました。この町のチームは、当時サンフランシスコ・ジャイアンツの3Aランクのファームチームで、そこには、調整中だった日本人メジャーリーガー、田中賢介（現北海道日本ハムファイターズ）がいました。彼もまた、MLBという夢を追って「太平洋を渡る橋」を越えてプレーしていたのです。

このフレズノを訪ねる前の日には、州都サクラメントにいました。ここにも3Aのマイナーチームがあり、ここには、現在オリックス・バファローズに在籍している中島裕之選手が在籍していました。奇しくも私がここで観戦した日は、いわゆる復刻ユニフォームデーで、サクラメントのチームは、かつてここにあったソロンズというチームのユニフォームで試合に臨んでいました。このソロンズというチームは、日系人野球の歴史を語る上で外せない存在で、オーガナイズドベースボール（MLBとその傘下のマイナーリーグ）初の日系人プロ野球選手が生まれたチームなのです。1932年、主田賢三（ケンソウ・ヌシダ）というハワイ生まれの2世選手がこのチームと契約を結んだのです（佐山：2015, 78）。

2-3. ブラジル日系人と野球

私がこれから研究しようとしているのは、ブラジルに渡った日系人と野球とのかかわりについてです。ブラジルのスポーツと言えば、サッカーが真っ先に思い浮かびますが、日系人コミュニティを中心に野球も行われています。野球版ワールドカップとも言えるワールド・ベースボール・クラシック（WBC）の2013年大会にブラジルが出場し、福岡での第1次ラウンドで日本代表・侍ジャパン相手に3対5というスコアで善戦したことをご記憶の方も多いでしょう。あの試合、終盤の7回まで3対2でリードを守っていたブラジルは、侍ジャパンを窮地に追い込みました。そもそも、この大会で初出場を果たしたブラジルは、前年に行われた予選大会において、冬季プロリーグをもち、メジャーリーガーも輩出しているパナマ、ニカラグア、コロンビアという強豪相手の「死の組」に入れられ、大方の予想では予選で敗退するものと思われていました。当初、この組の勝者は、本戦第1次ラウンドをプエルトリコで戦う予定だったのですが、ブラジルの本戦出場が決まった後、行き先が日本に変更になりました。これは、代表チームのメンバーの大半が日本でプレーしていたからです。日本でプレーしていた選手のほとんどは日系人で、

これにラテン系の白人、関係の良い野球大国キューバからの移民が加わって構成されたブラジル代表チームは「リトル・サムライ」とも呼ばれました。

WBC前後から他のエスニックグループの間でも競技者は増えているそうですが、現在のブラジル野球は、基本的に日系人の「民族スポーツ」です。こう書くと、この国に野球を伝えたのは日本人だと思われがちですが、実際は、19世紀の終わりから20世紀の初めにリオデジャネイロやサンパウロ在住のアメリカ人外交官や会社員が余暇を楽しむためにプレーしたのが始まりのようです。それを見た日本人たちが、自分たちもやってみようと1916年、サンパウロで青年会を発足させ、その後、日系人を中心にこの国の野球は発展していきます。この日系人野球の始まりには、1908年にサントス港に上陸した最初の移民船、笠戸丸でブラジルに渡ってきた者もかかわっています。

実は、日本人がサンパウロで野球を始めた当時、日本からブラジルへの移民送出は一時的に中断していました（高橋：1993, 97）。その後、関東大震災などの影響もあり、1924年には新聞社によって移民送出事業が再開され、その翌年には、政府が渡航を経済的に支援するという本格的な国策事業としてブラジルへの移民事業が行われるようになります。これ以降、太平洋戦争勃発までの時期に日本からブラジルへの人の移動はピークを迎えます（森：2011）。

この時期、つまり、大正時代から昭和初期には、日本において野球は人々の間に浸透し、人気スポーツになっていましたので、ブラジルに渡ってきた移民の少なからぬ者が野球経験をもち、移住先でプレーすることになります。この後、戦争によりブラジルは日本にとって敵国となり、前述のように、日系人たちはヨーロッパ系を本流とするブラジル・ナショナリズムを標榜するバルガス政権の下で弾圧の対象となるのですが、彼らにとって母国である意味「国技」に近い存在となった野球がどのような存在であったのか、また現在もあり続けているのかということに私は非常に興味をもっております。

戦後、日伯関係は正常化し、日本からの移民送出事業も再開されます。やがて、日本が高度成長を迎えるにつれ、日本から移住する人々も少なくなり、移民船も1971年5月に「ぶらじる丸」が神戸港を出港したのを最後にその役割を終えます。最初の移民船、「笠戸丸」が同じ神戸港を1908年の4月に発ってから63年が経っていました。

その間、豊かになった日本からは企業がブラジルに進出をしていくようになります。プロ野球チームを保有する飲料会社、ヤクルトは、販売促進も兼ねてでしょうか、1999年に野球アカデミーをサンパウロ郊外に設立します。ここから日系人選手が日本の高校や大学に留学したり、さらには日米のプロリーグでプレーするようになります。先述したWBC代表チームのメンバーのほとんどがこの出身です。

3. 還流移民にとっての野球とは？

すでに述べた通り、日本からブラジルへの移民は明治以降、第2次大戦を挟んで高度成長まで続きます。それ以降にもジャーナリストや研究者の移動など日本人はブラジルへ移動しますが、貧しさを抜け出すために太平洋を渡って地球の裏側へ向かう（ただし、ブラジルへの移民船はインド洋、大西洋周りでした）、「出稼ぎ」としての移民は、日本が豊かになった1970年代

はじめに終わったと言っていいでしょう。

彼らのほとんどは、離れたくて日本を離れたのではありません。もちろん、現地で待ち受けている苦難など予想せず、一攫千金の希望をもって船に乗った者も多かったでしょうが、その彼らも現地で一生を終えることなどほとんど考えず、富を手にして「故郷に錦を飾る」つもりでブラジルに渡ったはずで。結局、その夢はかなわず、彼らはブラジルに残る決心をし、「ニッケイ」ブラジル人になっていくのですが、マイノリティとしての彼らが、日本が近代化する過程で国民的スポーツとなった野球をアイデンティティの核のひとつとしたことは間違いないと私は考えます。国技である相撲は、十分に日本を想起させますが、「ブラジル人」がプレーしないこの競技は、「抗争の場」の機能を果たしません。一種のアイロニーになりますが、太平洋戦争では敵国となる米国生まれの野球をプレーすることにより日系人たちは「日本人」としてのアイデンティティを遠く離れた地で感じる事ができたのです（高橋:1993, 295-317）。

時は流れて、日本とブラジルの立場は逆転しました。1980年代、ブラジルは「失われた10年」と呼ばれる経済危機を迎えたのに対して、日本はこの年代の後半に「バブル」と呼ばれた好景気に突入します。労働集約型の単純労働、かつて日本人の多くがブラジルで就いたコーヒー農場での仕事がまさにそれだったのですが、今度はブラジルの日系人、それもほぼ「ブラジル人化」した2世3世が、3Kと呼ばれた下請け工場の非正規雇用労働者として来日します。かつて「棄民」として祖国・日本から体よく追い出された人々の血を引く人々が、数十年の時を経て、「還流移民」として祖国に戻ってきたのです。そして戻ってきた日本でも彼らは再び「棄民」的扱いを受けます。彼らは当時問題となっていたアジア系の不法滞在者に替わる雇用調整のバッファー、つまり、安価でいつでもクビを切れる使い勝手のいい労働力として、その後、1990年代以降の「失われた20年」の間、日本社会に翻弄されます。そういう中、ブラジルで野球を学び、「母国」でプロ野球選手となるべく来日するスポーツ労働移民の流れも生まれました（水野:2016, 178-196）

もはや日本語を解さず、ブラジル社会に溶け込んでいた彼らでしたが、多くの者は父祖から受け継いだ「ニッケイ」というエスニックなアイデンティティも持ち合わせています。そのアイデンティティの基調をなしたのは1世たちが帝国日本から持ち込んだ少々時代錯誤的なものでした。ある意味、現代の日本人以上に「日本男児」、「大和撫子」であることを家庭では求められ、古きよき日本の伝統を受け継ぐことを前の世代から要求されていた彼らは、日本の地を踏んで、さらなるアイデンティティの危機にさらされます（杉山:2008, 194-197）。彼らの目の前にあらわれたのは、極度に美化された祖国・ニッポンのイメージとは程遠い、現代の日本社会の諸相だったのです。ここで彼らのアイデンティティは「ブラジル人」に回帰します（イシカワ:2008）。

自分たちは、「ブラジル人」なのか、「日本人」なのか、はたまた「ニッケイ人」なのか。彼らのアイデンティティの揺れは、在日コリアンたちのそれに類似しているのかもしれませんが。野球というスポーツを通じての彼らコリアンのアイデンティティの揺れについては、1980年代の韓国プロ野球草創期に日本から玄界灘を渡った在日コリアンたちに関するノンフィクションで描かれています（関川:1988, 鄭:1989）、私も「在日」というある意味トランスナショナルなアイデンティティを利用してプレー継続を模索する底辺プロ野球の選手についての論考を

書きました（石原：2012）。

来日した日系ブラジルにとっての「ヤキウ」とはいかなる存在なのか。この問いに対する答えをまだ持ち合わせていません。現在日本にいる日系ブラジル人は20万人弱とされています。彼らの多くは、かつて彼らの祖先がそうであったように、日本への移動を「デカセギ」、つまり一時的なものにとらえ、ブラジルと日本との間で、アイデンティティの揺れを感じています。冒頭で紹介した、この冬、メキシコで武者修行をしていた日系ブラジル人選手は、メキシコでプレーすることで、自分が「日本人」だと感じながらも、現役引退後はブラジルに帰るだろうと言い、自分が本来いる場所は生国であるブラジルであることを示唆していました。

おわりに

以上、「太平洋を渡るベースボールの橋」というお題と本シンポジウムの主役であるステイブルズ氏の日系アメリカ人野球のパイオニアという研究テーマを受けまして、太平洋を渡った移民の歴史を大まかに振り返り、発祥の地、米国から太平洋を渡った野球が、日本からの移民によって地球の裏側にあるブラジルに根付いていったことを述べました。今後、私はこれに関して、日系ブラジル人にとって野球がいかなる意味をもつものなのかを探求していくつもりです。

実のところ、母校ではあるものの、大学院在籍中は全く縁のなかった「国際言語文化研究所」から登壇の依頼を受けたとき、少々畑違いの感を持ちました。しかし、よくよく振り返ってみれば、私は立命館大学国際関係研究科に入学した時、つまり研究者としてのスタートを切った時、「多文化共生コース」を選び、多言語国家の多いアフリカにおける人々のアイデンティティを研究テーマとしました。

その後、後期課程（博士課程）に進むとき、スポーツ社会学に「宗旨替え」をしたのですが、この度、新たな研究テーマに取り組もうとしたその時に国際言語文化研究所主催のシンポジウムにお誘いいただいたことは、単なる偶然ではなく、私の研究がある意味、「原点回帰」したことによる運命的な必然を感じている次第です。

1世紀前には、40日かかったブラジルへは現在丸1日あれば行くことができます。グローバル化は時空的に地球を小さくしました。しかし、心理的には世界中の人々の間には、まだまだ隔たりがあるように思います。スポーツはその隔たりを縮めるツールになる可能性を秘めていることは、「野球」というテーマが、太平洋の向こうにお住いのステイブルズ夫妻と我々登壇者、そしてこの場にいらした聴衆の方々が空間を共有したことが証明していると思います。私の今後の研究が、スポーツを通じた多文化共生に寄与するものとなるようこれからも精進したいと思います。

注

- 1) 日本を出て、国外に居住する人々を「日本人」と表記するのは、その人々が帰国を前提に国外に出ていると筆者が考える場合、「日系人」と表記するのは、もはや日本への帰国が不可能と悟り、現地での永住を決めただろうと筆者が考える場合である。
- 2) 厳密に言うと、丸山はこの移民ではなく、1886年の日布渡航条約以降の移民を「官約移民」としている。また、高橋（1993, 10）は、この最初のハワイ移民を「官約移民」とし、その渡航年も1885年と

している。

参考文献

- 童安伏 (2012) 「新台湾ナショナル・アイデンティティの形成に及ぼす国際野球イベントの影響:2001年ワールドカップを事例にして」『体育学研究』 57, 103-118.
- フルモト, テッド・Y (2014) 『バンクーバアサヒ: 日系人野球チームの奇跡』 文芸社文庫
- グットマン, アレン, 谷川稔ら訳 (1997) 『スポーツと帝国: 近代スポーツと文化帝国主義』 昭和堂
- 林勝龍 (2011) 「日本統治下における理蕃政策と蕃人野球チーム『能高団』」『スポーツ人類学研究』 13, 17-38.
- イシカワ・エウニセ・アケミ (2008) 「『日本の記憶』と『ブラジルの記憶』—日系ブラジル人のアイデンティティー」『Quadrante: 四分儀 地域・文化・位置のための総合雑誌』 10, 177-186.
- 石原豊一 (2012) 「グローバルスポーツシーンにおける『コリアン』・アイデンティティの変容: ある『在日』野球選手の事例から」『コリア研究』 3, 109-120.
- (2013) 『ベースボール労働移民—メジャーリーグから「野球不毛の地」まで—』 河出書房新社
- (2015) 『もうひとつのプロ野球—若者を誘引する「プロスポーツ」という装置—』 白水社
- Klein, Alan M. (1991) *Sugar Ball: The American Game, the Dominican Dream*, Yale University Press.
- 丸山浩明 (2010) 「ブラジル日本移民の軌跡: 百年の『大きな物語』」丸山編著『ブラジル日本移民百年の軌跡』 明石書店, pp.113-191.
- 水野龍哉 (2016) 『移民の詩—大泉ブラジルタウン物語』 メディアハウス
- 森幸一 (2011) 「ブラジルにおける日本移民研究の回顧と展望」『コンフリクトの人文学』 3, 203-265.
- 大島祐史 (2006) 『韓国野球の源流: 玄界灘のフィールドオブドリームズ』 新幹社
- (2008) 『コリアンスポーツ < 克日 > 戦争』 新潮社
- 佐山和夫 (2015) 『1935年のサムライ野球団:「裏ワールドシリーズ」に挑んだニッポニーズ・オールスターズの謎』 角川書店
- 関川夏央 (1988) 『海峡を越えたホームラン: 祖国という名の異文化』 朝日文庫
- 杉山春 (2008) 『移民還流: 南米から帰ってくる日系人たち』
- 高橋幸春 (1993) 『日系ブラジル移民史』 三一書房
- 鄭仁和 (1989) 『いつの日か海峡を越えて: 韓国プロ野球にかけた男たち』 文春文庫
- トムリンソン, ジョン, 片岡信訳 (1997) 『文化帝国主義』 青土社
- 矢ヶ崎典隆 (1996) 「カリフォルニア州サンホアキンバレー北部の日系計画植民地」『横浜国立大学人文紀要. 第一類, 哲学・社会科学』 42, 41-58.

